

# The Newsletter

# HOSEI I.J.S.

No.6 Mar.2007.



## CONTENTS

公開ワークショップ報告	2
シンポジウム報告	7
日中文化研究会報告	11
学術研究員定例研究会報告	13
研究集会報告	14
活動の足取り／新刊案内	16

## パリ・シンポジウム第1回成果検討会

●日 時：2006年7月31日(月) 14:00—18:00  
 ●場 所：80年館7階 大会議室(角)

## 「パリ・シンポジウムを振り返る —会議でのコミュニケーションを中心にして報告する」

**桑山 敬己**

(北海道大学大学院文学研究科教授)

2005年12月1—3日パリで行われた国際シンポジウム「日本学とは何か」の成果を検討する連続ワークショップ第1回の口火を、桑山敬己氏に切っていただいた。桑山氏は人類学者らしく、シンポジウムそのものを観察の対象として、そこで確認されたことから出発して、国際日本学構築に向けての諸課題を提起して下さった。

桑山氏が第一に取り上げたのは国際日本学における言語の問題である。シンポジウムでは日本語と英語が用いられたが、桑山氏によれば、ヨーロッパからの参加者たちの日本語レベルは、この種の学会でも例外的に高かつたという。しかしながらと言って、日本語を国際日本学の共通言語とするにはハードルは高すぎるのではないか。他方、英語をそうするには、今回でも、また一般的に言っても、日本側に問題が残る。こうして氏によれば、今回のシンポジウムでコミュニケーションが比較的うまくいったとすれば、それは専ら同時通訳者の尽力によるものだったのである。しかしこのような通訳をいつでも望めるわけではない。

次に問題とされたのは、国際日本学の学問的内容である。すなわち桑山氏の見たところ、主催者の一定の努力にもかかわらず、諸発表の多彩さの陰で、今回、焦点ボケが生じていたことは否めないのである。しかも氏によれば、これは地域研究としての日本学のいわば宿命なのである。日本学は日本をその全体性において扱うがゆえに、学際的であらざるを得ず、社会学や人類学、歴史学、地理学といった諸学を巻き込むのである。ところがそれら諸学は互いに近いがゆえに反りが合わず、日本学は内部で常に「矛盾」を抱え込むことになる。氏はそれを克服するには、強力なリーダーシップの下での少数精銳での作業を遂行していく他はないであろうとした。氏によれば、国際日本学は大きなシンポジウム向きの学問ではないのである。

第三に桑山氏が言及したのは、国際日本学における日本人研究

者の役割と振舞いの問題である。氏によれば、そこで日本人研究者は国内の学会におけるいつもの語り方、振舞い方を繰り返してはならないのである。それでは誰にも理解されないであろう。国際日本学といった文脈では、イージーであってはならないものの、プレインでなければならない。それを実現していくための氏の提言は、国際日本学のコミュニケーションで用いられる基本語を、各分野で前もって確定させ、語彙集のような形にしておくこと、また、日中韓に限って言えば、漢字での共同作業の可能性を追求すること、であった。

最後に桑山氏が取り上げたのは、逆にそこでの外国人研究者の役割と振舞いの問題である。氏によれば、国際日本学で外国人研究者が日本人と全く同じように振舞うことは、実は望まれていない。外国人に日本のことをわかってほしいものの、その際に他者性が維持されることも常に同時に期待されているのである。すなわち、自他の乗り越えがたい相違が主張されてはならず、相互理解が求められなければならないのであるが、その理解はまったく同一の土俵上のものであってはならず、異なる観点のものでなければならないのである。氏は国際日本学がその表向きの見えとは裏腹に、自己の文化的防衛への傾向を隠し持っていることを示唆されたのである。



## 「国際日本学構築に向けての課題—パリ・シンポジウムを受けて」

**星野 勉**

(法政大学国際日本学研究所所長・文学部教授)

当日は引き続いて、本COE拠点リーダーでもある星野勉氏が、やはり2005年12月パリ・シンポジウムでなされた諸発表から出発して、国際日本学構築の柱となるべき方法的諸要素を提示する作業を行った。

星野氏がまず取り上げたのが、〈文化相対主義〉である。これはシンポジウムの発表から直にではなく、どの発表も自ずから暗黙の前提としていたルース・ベネディクトの仕事からのものであった。文化と文化とを外から絶対的に序列付けるような尺度は存在せず、それぞれの文化はそれ固有の価値を有している。それゆえ、どのような文化に属している者も、他の文化に対しては、寛容な態度をこそ要請されるのである。星野氏は、国際日本学においても、それを行うのが日本人であれ、外国人であれ、方向は逆とはなるが、

それそれが抛って立っている自国文化の相対性を歴然と自覚することから出発しなければならないと説いた。

続いて星野氏が取り上げたのは、シンポジウム発表でジョセフ・キブルツ氏が主張した〈反照的原理(reflexive principle)〉である。文化と文化が共約不可能で相対的に並び立つということは、文化と文化が全くの没交渉にあることを意味しない。自文化と他文化とは互いに異なりつつ互いに照らし合い、そのどちらにアプローチをする際にも、一方は他方の鏡となり、一方の理解は、他方からの照り返しに条件付けられていくのである。両者の理解は、両者相互の間の差異への気付きからのみなされていく。この〈反照〉は、個々それぞれの文化が暗黙の前提としている固有の知覚の枠組みの差異までをも照らし出すと言う。そしてこの差異の理論化こそが、国際日本学が何より担うべきものなのである。

星野氏が第三に取り上げたのは、シンポジウムで島田信吾により提唱された〈関係的解釈学（relational hermeneutics）〉である。これは、文化と文化の差異が言わば静的に照射に関わるだけではなく、両者間では動的な翻訳のプロセスが発動すると主張するものである。そもそも自己のイメージも、他者のイメージも、自己と他者とのこのアンビバレントな混合から、そのつどそこで事後的に構成されていくのである。こうして、通常の解釈学が説く、固定的な準拠枠などは存在しない。自他の意味の境界そのものが、そのつど新たに生成されていく。意味コードとはそこで働いてい

る動的なプロセスに他ならず、国際日本学が日本を扱う際にも、日本を、そのような自他の意味生成の場と見なしていかなければならないのである。

星野氏に従えば、以上の三つの方法論的柱に依拠するとき、日本人が行う日本学が、シンポジウムで桑山氏により示された〈ネイティブ人類学〉にもなるし、また、それは、和辻哲郎が提唱する〈解釈学的破壊〉の場ともなりうるのである。

（法政大学文学部教授 安孫子 信）

## パリ・シンポジウム特別成果検討会

### 「翻訳と文化アイデンティティ」

● 日 時：2006年9月26日(火) 18:30—20:30  
● 場 所：ボアソナード・タワー25階 C会議室

島田 信吾

(デュッセルドルフ大学東アジア研究所教授)

2005年12月パリ・シンポジウムにも招請し、興味深い発表をしていただいた島田信吾氏を迎えてのワークショップで、御著書『日本の構築』(原題“Die Erfindung Japans”2000, Campus)で展開されている、拡張された翻訳概念に基づく、関係性からの文化アイデンティティ形成論の丁寧な説明をしていただいた。その論は、内容と方法の両面で、国際日本学に貴重な示唆を与えるものであった。その主旨を以下三項にわけて紹介してみたい。

#### 1. 翻訳と文化

発表の第一部ここで島田氏の主張は、翻訳は通常考えられているように、固定された二つの文化を前提し、その間で大なり小なり首尾よく行われるというものではなくて、文化のアイデンティティそのものが実は翻訳の結果として形成される、というものである。ヨーロッパは自らは安泰の場所におり、支配を目的に未開文化を翻訳して自らのものとすることにただ腐心してきたように見える。しかしこの間にも少なくとも未開文化の方はヨーロッパ文化と出会い、それを翻訳し吸収することで大きく変わっていったのである。日本も19世紀の後半にヨーロッパ文化と出会い、その翻訳作業を通して、日本語を変貌させ、自らの文化アイデンティティを形成していったと言える。翻訳とはこうして本来、自他のせめぎ合いの場であり、文化アイデンティティを否応無く形成させる動的プロセスなのである。

#### 2. 共同体と社会

発表第二部で島田氏は、19世紀日本で翻訳がこのように機能したことを、社会科学の基礎概念の導入を例として引いて説明していく。「社会学」という概念がスペンサーの翻訳を通して導入されたとき、「社会」と「共同体」の両語も導入されたが、訳者（有賀長雄）は古い「共同体」から新しい「社会」へというスペンサーの進化の考えには首肯できずに、日本では家族的共同体のままで近代化はなされると主張することになった。これは日本における家族ディスクールの出発点であって、このディスクールはそれ以降、戦争を経て、今日の日本人論・日本文化論（例えば、中根千枝『タテ社会の人間関係』、村上泰亮『文明としてのイエ社会』）に至るまで、日本文化のアイデンティティ論を支配することになっていった。こうして明治以来の日本の文化アイデンティティは、翻訳を通じて直面された自他の差から、他者イメージと同時並行的に形成されていったのである。

#### 3. 翻訳文化と関係性のアイデンティティ

このような日本の文化アイデンティティの形成を国際日本学の観点からみるとどのようなことが問題になりうるかについて、島田氏は、まず、日本文化が、古代においては中国文化を、そして近代においてはヨーロッパ文化を、質量ともに圧倒的な仕方で翻訳し導入していった実績と経験から見て、翻訳は、国際日本学が、日本文化を位置づけようとする際に格好の場となるであろうと指摘した。しかも、翻訳を通じてまた翻訳の結果として、日本文化はそのアイデンティティを、19世紀の場合には、ヨーロッパなる他者（オクシデンタルズム）とアジアなる他者（オリエンタルズム）を同時に形成しつつ、それらとの関係性の中で動的に構築していくのであって、島田氏によれば、国際日本学がそこに定位するとき、それは、エリクソン的な固定的アイデンティティ論を打破し、新たなプロセス的なアイデンティティ形成論を展開しうるものになるはずなのである。

（法政大学文学部教授 安孫子 信）



## パリ・シンポジウム第2回成果検討会

日 時：2006年9月30日(土) 17:30—21:00  
場 所：ボアソナード・タワー19階 D会議室

2005年12月パリ・シンポジウムで翻訳に関して貴重な発表をして下さった田中優子氏、また当シンポジウムの実質的なオーガナイザーでもあったジョセフ・キブルツ氏をお迎えしての第2

回成果検討会は、国際日本学の理論と実践の両面に関わり、様々な提言がなされる、きわめて有意義なものであった。発表の順に、当日のお二人の問題提起とご提言の概要を以下に記していきたい。

### 「日本学への2、3の提言—パリ・シンポジウムに参加して」

田中 優子

(法政大学社会学部教授)

田中氏は、「日本を異文化として捉える」という国際日本学の基本姿勢を是としつつも、例えば、近世日本文化が現代のわれわれにはもう「異文化」なのであり、通常の日本文化研究がすでにこの姿勢に立たざるをえないものであって、ただこの点だけを国際日本学の売りとして強調していくことには違和感があると指摘された。加えて、このような国際日本学の言説が(それが日本人によってなされる場合)、一定の相対性を装いながらも、結局は「日本人とは…」、「日本的とは…」といった、自らのそもそもの存在理由を掲げる「意味づけ依存的」なものになってしまふことにも違和感を語られた。

そのような姿勢に対しては、氏はまず、日本文化が他とは独立ではなく、他とともに作り上げている側面(文化混交)、また、他とは異なるではなく、他と共に有している側面に、国際日本学はむしろ光を当ててもよいのではないかと示唆された。さらに氏は、国際日本学は、「外に見せたい日本」を無意識にも志向してしまうのをできるだけ回避して、実際にそうであり、実際にそう「外で見ている日本」を、自意識による処理を加えずに、そのまま受け入れ、データ集積していくような方向性をむしろ目指すべきではないかとも示唆された。具体的には、①16世紀にまで遡るであろう、外国人研究者による日本学研究に関わるこれまでの出版物や論文のデータ・ベース化、②外国における日本の美術工芸品の収集状況のデータ・ベース化と収集先のネット・リンク化、さらに、③日本人による日本学研究の優れたものを英訳してシリーズとして出版していく作業、④日本人研究者が日本学の分野で学

会発表や出版を英語で行っていくことへの支援の仕組みの構築、⑤日本文学・日本史・日本学の原テキストのネット上のテキスト・データ・ベースの情報管理などが、国際日本学が行っていくべきこととして挙げられた。

こうして、氏は、これらの基礎作業について、自らの周辺性を自覚し、今日の国際語である英語で発信していくことの重要性を強調しつつも、これは自らの日本像を世界に伝播させるといったものではなく、むしろ、どのような仕方・レベルにおいてあれ、日本に興味を持つ人が、知りたいことがあると申し出てきたとき、それに答え、必要な情報提供ができるよう、「役に立つ」、ネットワークのハブを形成することなのだ、と語られた。氏によれば、国際日本学の構築とは、このような情報拠点の構築に他ならないのである。



### 「ヨーロッパにおける日本研究と人文科学の未来」

ジョセフ・キブルツ

(フランス国立科学研究中心教授)

キブルツ氏は今回はむしろ、ヨーロッパにおいて日本学が置かれている現状と、将来展望について語って下さった。様々に困難が生じていて、日欧の両側で、日本学研究者が粘り強く打開の対応をしていく必要が語られた。

氏はまず、日本学の存在の特殊性に触れられた。フランス学やイギリス学、アメリカ学がそれとしては存在していない中で、日本学が存在しているということ、これは西欧から見て、日本が対照点に存在しているという、ギャップの大きさからのことと考えられると言う。その際、日本学は本来、歴史学や地理学をも含む総合学であるべきであろうが、外にある日本文化を理解したい、内にある日本文化を理解させたいといった欲求により直接的な、文学や演劇などといったジャンル別の、比較文化論の形を取ることになったとも指摘された。日本学はこうして直接の必要といったことからは遠い、きわめて人文科学的な学問なのである。

それにしても、教育・研究がもっぱら公的援助で行われているヨーロッパでは、研究を行うことの実利を示し、研究の正当性を

示していく努力が常に求められている。相互理解は何のためにあり、何を目的としているのか。それは係争を回避するためか、経済的利益を追求するためか。この点では国の財政状況や国際的情勢の変化の影響も大きく、結果として、日本研究が組織的な独立性を保てずに、中国・チベット研究と合体させられるといったことも生じている。氏によれば、研究の効率を高めることへの要求は、研究費配分の決定が、国レベルを超えてヨーロッパ・レベルへ移管されていくにつれてさらに強化されてくるはずであり、日本学は、そして広く人文科学一般は、それへの待ったなしの対応を迫られているのである。

他方でキブルツ氏が取り上げたのは、日本学にはそれ固有の根本問題が存しているということである。すなわち、ヨーロッパ文化と日本文化とは隔たりが大きく、ぎりぎりのところで両文化はおそらく通約不可能なのである。そうだとして、活発に行われている翻訳や通訳で、われわれは何をどこまで理解しているのか。そもそも何かを理解しているのか。理解するとはどんなことなの

か。これらの問いは、言葉で、言葉だけで日本学は何をなしうるのかを問うことであり、それへの答え如何によっては、日本学は、言葉の手前にあるものや、言葉を越えたものにも積極的に訴えて、それらを用いていくことも合わせて考えていかなければならぬことになろうと、氏は示唆された。

(法政大学文学部教授 安孫子 信)



## パリ・シンポジウム第3回成果検討会

● 時：2006年10月21日(土) 17:30—21:00  
● 場 所：ボアソナード・タワー25階 C会議室

### 「韓国における親日・反日から日本学を考える」

崔 吉城

(東亜大学教授・広島大学名誉教授)

本報告は、韓国での日本研究が、韓国政府の反日政策という政治的事情に翻弄されてきた経緯を紹介することから、始められた。

戦後の韓国政府の外交政策は、反日、反共政策を軸に展開されてきた。1980年代半ばから、日本経済の高度成長にともない、日本に対する関心が高まり、日本留学などから帰国した研究者による日本研究は著しく増加した。さらに、2000年6月には、ソウル大学でも「日本語・日本学」の研究教育が本格的に開始されるようになった。しかし、日本研究に対する敵対的な傾向はなお根強く残っている。

もとより、反日の根には1910年から45年までの日本による韓国の植民地支配がある。しかし、さらに、1) 戦後日本の経済的成功による中国、韓国、日本というヒエラルキーの逆転が認めがたいこと、2) 日本の経済的繁栄が勧善懲惡という倫理観からみて容認しがたいこと、3) 日本とはもともとライバル関係にあること、などといった心理的要因が反日感情には絡んでいる、と崔氏は分析する。

日本による韓国の植民地化の実態を、反日政策や反日感情とは独立に客観的に研究することの必要性を認め、「新親日派」とのレッテルや反撃に抗して、客観的、総合的な観点から日韓関係の研究、日本研究を進めてこられた、ご自分の研究者としての経歴を披露されたあと、崔氏は、そのような研究の一例として巨文島の日本村での植民化による文化変容についての調査研究の成果などを報告された。その報告から、日韓両国の政治的な思惑のもとで植民地支配の客観的な研究がきわめて困難であること、それゆえになかなか実像が見えにくいことを思い知らされるなかで、日本による韓国の植民地支配の実態の一端をうかがい知ることができた。それは、ことがらそのものに迫ろうとする崔氏自身の研究姿勢とあいまって、新鮮な驚きであった。

歴史的な経緯がどうであれ、日本による韓国の植民地支配が正当化されることはありえない。しかし、植民地支配というネガティヴな状況のもとでの文化変容が、それにもかかわらず、異文化間の接触・交流という側面をともないうこと、したがって、植民地支配のうちに、日本社会の組織原理、日本文化の独特的スタイル、そして、人的・文化的交流における日本のスタイルが表現されていることを認めうること、また、そこに生じる軋轢から日韓文化の差異、異文化理解の難しさに思いを致さざるをえないこと、そういうしたことを、崔氏の報告から考えさせられた。

報告後の議論では、日韓関係の研究、韓国での日本研究、日本での韓国研究が、現実の日韓関係という政治的文脈やイデオロギーに翻弄されざるをえない事情、日本による韓国の植民地支配をどう受け止めるかという問題、儒教についての日韓のとらえ方の違い、そして、植民地支配という不幸な状況下で後におお「懐かしさ」とともに回顧される人的・文化的交流をどう評価して、どう言語化していくかという問題が取り上げられ、熱心に討議された。



## 「日本学の可能性—中国の視点から—」

王 敏

(法政大学国際日本学研究所教授)

王敏氏の報告は、ベルギー、ルーヴアン大学教授ヴァンデ・ワラ氏のパリ・シンポでの報告「日中の文化的交差と乖離——ヨーロッパの一視点から」をうけ、「同文同種」とも称される日中文化の比較を通じて、中国の視点から国際日本学の可能性を改めて問い合わせるものであつた。

ヴァンデ・ワラ氏の報告によれば、日本人による自文化理解自分が、それを中国文化に組み入れるか、それとも独特の文化としてそれから切り離すか、二つの極の間を揺れ動いている。もともと、文化とは「概念・価値・規範を包含する概念」として、「境界」を画すために用いられる概念である。しかし、それはまた「政治的な」ものでもあって、そのかぎり、時間経過の中で変化しうるものである。ちなみに、ヨーロッパからは、日本研究は、中国研究に依存したもの、あるいはその副産物と見なされてきた。それは、多くの文化が主要文化から派生したように、日本文化も中華文化から派生したという、ヨーロッパの東洋研究者の先入見に由来する。

しかし、ヴァンデ・ワラ氏によれば、日本における中国文化への対応に大きな変化の認められる時期が二つある。一つは遣唐使が廃止された9世紀末の平安時代、もう一つは国学者によって中国との文化的差異の問題が提起された18世紀の江戸時代である。とりわけ、18世紀以降、日本人の目は洋学に向けられるようになる。



王氏は、ヴァンデ・ワラ氏のこの観点を継承し、吉宗による禁書令の緩和(1720年)に日本文化の分岐点を認める。そして、これを分岐点として、日本は西洋の文明・文化を積極的に取り入れ、中国文化から西洋文化への傾斜を強めるが、その後明治維新を経て、西洋文明・文化をモデルとする近代化を成し遂げた、と見る。中国でも日清戦争敗北後、日本の明治維新にならった戊戌維新・変法が康有為らによって企てられたが、その失敗は、義和団事件等とあいまって、近代化の遅れと、アヘン戦争以来の列強による半植民地化を決定的なものとする。そうしたなかで、中国における日本觀と日本研究は、アジアにおける近代化の先達者であると同時に中国侵略者であるという日本の両面的なあり方に応じて、日本文化の受容・吸収と排斥・批判とが交錯することになる。中国から見れば、諸列強の一員たろうとする日本と西洋との境界が不明瞭になり、その分、日本と中国との差異が際立ってくるという事態が生起した、というのが王氏の分析である。

最後に、王氏は、文化相対主義における共約不可能性という考え方に対するヴァンデ・ワラ氏の批判に寄り添いながら、文化の内部と外部を越境する武満徹氏の例を挙げ、異文化理解の可能性を示唆する。そして、この報告はヘーゲルからの引用で締め括られる。すなわち、「文化間の障壁は進入不可能なものではない」。

報告後には、西洋の文明・文化の受容の仕方に日中間では差異があるのではないか、そして、その差異のよってきたる所以は何であるか、同じ東洋においても、中国、韓国が論理的なのに対してなぜ日本は非論理的なのか、文化の内部と外部の越境ということで何が生じているのか、はたしてそれを言語化することはできるか、などについて熱い議論が交わされた。

崔吉城氏「韓国における親日・反日から日本学を考える」と王敏氏「日本学の可能性——中国の視点から——」の両報告からなる、この日のワークショップは、11月のシンポジウム「国際日本学——ことばとことばを超えるもの」に課題を投げる、きわめて有意義なワークショップであった。

(国際日本学研究所所長 星野 勉)

# 国際日本学シンポジウム

## 「国際日本学—ことばとことばを越えるもの」

日 程：2006年11月18日(土)－19日(日) 場 所：ボアソナード・タワー26階 スカイホール、富士見坂校舎1階 会議室

国際日本学は、日本人自身が行う日本についての研究(内側からの日本学)と外国人が行うそれ(外側からの日本学)とを密接につなぎ、日本(とくに日本文化)が国際的にさらに活発な関心の対象となるように努める試みである。この試みは、内と外によるこの共同作業を具体的に行っていくことと、共同作業を巡っての原理的な諸問題を問うこと、つまりは実践と理論の二側面を有している。しかるにその理論面を内外の共同作業で行っていくとすれば、それはすでに国際日本学の実践ともなるのである。国際日本学のこうした意味での実践が2005年12月パリでの国際シンポジウムで行われ、その成果が2006年7月以降、報告会の形で計4回(7月31日、9月26日、9月30日、10月21日)検討された後、それらを受けて行われたのが、「ことばとことばを越えるもの」を

テーマとした、同年11月18日－19日の東京(法政大学)での国際シンポジウムであった。そこでは、〈ことばを越えるものに迫るために、ことばをどう用いるのか〉、また〈ことばを喚起するために、ことばを越えるものをどう用いるのか〉の二つの問い合わせ軸に、国際日本学の構築の可能性が改めて論じられた。シンポジウムの詳細は近刊の報告集に譲るが、両日の発表の大要を以下簡単に取りまとめていきたい。



■11月18日

### ワークショップ「翻訳とことばを越えるもの」

初日のワークショップでは、国際日本学のこれまでの議論でもしばしば触れてきた翻訳の問題が集中的に論じられた。日本への国際的な関心は、時にことばによって、また時にはことばではなく他のものによって喚起されようが、ことばによる場合には、日本語の周辺性から、それは必ず翻訳を介してとならざるをえない。こうして、翻訳は、内と外の日本学が共有し、かつ国

際日本学が問わざるを得ない中心問題である。翻訳の可能性はただちに国際日本学の可能性を意味しようし、また、翻訳の困難はただちに国際日本学が解決すべき困難となるであろう。当日4人の報告者からなされた翻訳をめぐる問題提起は、概ね以下のようなものであった。

### 「漢字と万葉語の関係」

間宮氏の報告は、日本文化はその歴史の始めからすでに広い意味での翻訳作業を巻き込んでいたという事実に関わる。すなわち、当初文字を持たなかつた日本文化は、中国の漢字を学び、それを借りて、自語を表現しようとしたのである。それが万葉語である。これは日本語を中国語に直すという本来の意味での翻訳作業ではないにしても、中国の文字を用いて表記する過程で、翻訳の側面を有したことは否めない。氏の発表の力点は、この際に日本人が行った作業の柔軟さ、自由自在さにあって、それがゆえに、今度はその万葉語を読み下そうとした際に、後世は、一筋縄でいかない困難を抱え込むことになってしまったのである。今日に至るまで続けられている後世の訓読みの作業は、それこそを翻訳作業と

間宮 厚司

(法政大学文学部教授)

言いえよう。その作業には学問的客觀性の最大限の厳格さと同時に想像力も要求されてくる。ただその翻訳作業の困難さは、何かネガティヴなものなのではなく、古代人の精神の豊かさを再発見する喜ばしい過程でもあるのである。



### 「古典文学作品の翻訳—訳者は何を目指すべきか」

ネルソン氏の発表では、文学古典の翻訳が出会う困難が、実例も用いて詳細に報告された。翻訳は読者に対する「理解のしやすさ」と原文に対する「正確さ・忠実さ」という二要素のバランスよい配置を求めてくる。しかしこの二要素をそれぞれとして満たすことは不可能である。すなわち、一方で、翻訳者は何らかのイデオロギーや詩学上の立場に前もって条件づけられていて、読者とニュートラルに向こうすることは不可能である。さらに他方で、語とその意味は他の語・意味との有機的なネットワークに巻き込まれており、また文はリズムや文体が与える色合いとも不可分であつて、翻訳者が原文の意味を裸で取り出すこともまた不可能なのである。加えて、翻訳者が二つの要素の一方を重視しようと努力す

スティーヴン・G・ネルソン

(法政大学文学部教授)

れば、他方の要素からは離れざるをえないという関係にもなっている。こうして他から引きつつではあるが、氏によれば、よい翻訳は、読者の「理解のしやすさ」といったことではなく、「翻訳言語の限界を超えてその表現力を豊かにする」ことに赴くことになる。また、よい翻訳は同じく、原文への「正確さ・忠実さ」ではなく、「原文の核を成す文学的特質の共有」へと赴くことになる。



# シンポジウム報告

## 「異国語翻訳と異文化翻訳」

田中氏の発表ではやはり文学古典の外国語への翻訳の諸問題が、その日本語現代語訳の問題と重ねて報告された。氏が問題の根として指摘したのは、異言語の翻訳は異文化の翻訳を巻き込まざるをえないという事実である。古典の訳は当時の文化や社会や職業の正確な知識なしには不可能なのである。そしてこのような情報的知識だけではなく、さらに当時の人々のものの見方や感じ方といった、より内的なレベルでの文化の知識もまた重要である。氏が例として上げるのは、当時の文が必ずしも主語を特定しないでいて可能であった語りのニュアンス、今日のカテゴリー（「起承転結」）やジャンル分け（「短編／長編」）には収まらない当時の物

田中 優子

（法政大学社会学部教授）

語の形、必ずしも因果的説明を求める当時の人の感情のあり方、さらには、言葉を理解するというよりも言葉を体験していたはずの当時の読書のあり方などである。それに伴われなければ、信を置くことができる翻訳は不可能なのである。



## 「日本の近代化と翻訳文化」

島田氏の報告の狙いは、近代日本が行ったヨーロッパ文化の翻訳を例に、翻訳が持つダイナミズムを検証することであった。そのことから、日本文化の翻訳文化の側面が、受動的で従属的とのみ見なされてはならず、良くも悪くもむしろそれが日本文化の積極面であるとして、外に発信されるべきだと示唆もなされたのである。具体的に問題とされたのは、明治期における個人概念の日本への移入である。その際にこの概念は、中村正直訳・スマイルズ著『西国立志伝』などを通して、ヨーロッパでは理性と自由と進歩の担い手を言うものであったのが、立身出世という、社会での成功物語の主人公の地位に、新たに据え直されていったので

島田 信吾

（デュッセルドルフ大学東アジア研究所教授）

ある。ここにあるのは、ヨーロッパから学びつつ、しかし、ヨーロッパの個人主義を異文化として立てて、自らには集団主義を選択していった日本文化の姿である。翻訳は、もとの概念のただの移し入れではなく改鑄をこそ意味するのである。翻訳の力は同化ではなく、むしろ異化にこそ存するとも言い得よう。



■11月19日

## シンポジウム 「国際日本学—ことばによって、そして、ことばを越えて」

初日に扱われた、日本への関心の喚起がことばによっている場合に加えて、二日目のシンポジウムでは、関心の喚起がことばではなく他のものによる場合が扱われた。さらには、ことばによって関心が引き起こされる場合でもその背後で働いている、こと

ばでないものの重要性が議論の対象とされていった。こうして、ことばとことばを越えるものとをつなぐ場所に関わって、3つのコーナー計6名の発表者からなされた問題提起と、最後の全体討議に先立つ総括報告とを、以下では順にたどっていきたい。

### ●「ことばを越えてみること」

#### 「工芸美術や民具コレクションの役割

#### —日本研究と日本観との相互関係についての一考察」

ヨーゼフ・クライナー

（法政大学特任教授）

クライナー氏の報告は、ヨーロッパにおける日本についての言説（ことば）と美術館・博物館における日本関係諸物（ことばではないもの）の蒐集とが、相互にどれほど深い影響関係にあるのかを示すことにあつた。氏はそれを二つの顕著な例によって示していく。その一つがアイヌ民族文化に関わるもので、「高貴な野蛮人」としてのアイヌ観に加え、アイヌ日本原住民説やアイヌ白人説などが特にドイツで唱えられた当時、人骨標本をも含むアイヌ

民族関係諸物の蒐集が目覚しく進められたことが指摘された。他方で、通商関係の成立当初より、漆器・陶器・着物・屏風といった日本工芸美術品がヨーロッパに流入して、ヨーロッパでのポジティブな日本観の形成に寄与していくが、明治以降にさらに加速された美術工芸品の流入と蓄積こそが、現在にも至る日本イメージのヨーロッパでの形成に決定的な役割を果たしたことは否めない、ということが改めて指摘された。

#### 「ことばを越えて—円山応挙の西洋文明へのまなざし」

ジョセフ・キブルツ

（フランス国立科学研究中心教授）

キブルツ氏の報告は、例として円山応挙の一絵画作品（「海上白骨座禅図」）を取り上げ、ことばを越えるものを凝視することで、しかもそれを内外の共同作業の視点、つまりは国際日本学の複眼

的視点を通して凝視することで、どれほど興味深い成果がもたらされるかを示すものであった。これまでの国内での応挙研究は、この応挙晩年の作品に漠然と宗教的な意味合いを指摘する以上

に踏み込んだ解釈を与えるべきだった。この作品はそれほど既存の作画の枠組みを超えるものだったのである。キブルツ氏は国内研究のそのような消極的な成果によりつつ、他方で西洋の絵画史の知識に基づく外からの視点をそれにぶつけることで、この絵画の内に、深い意味での東西の文化の対話が見出されると主張したのである。すなわち氏によれば、ヴェサリウスの解剖学書中のティツィアーノの手になると言われる「メント・モリ」(死を忘れる)の骸骨挿絵を応挙は目にし、単にこの挿絵の技法だけではなく、それが発する精神的なメッセージをもことばを越えて理解し、それに答えるべく描き上げたのが「海上白骨座禪図」であったと言うのである。以上の出会いの歴史的蓋然性も精密に説明されており、この解釈は応挙研究に大なる波紋を投げかけうるものであろう。氏の報告がそうするように、国際日本学の相補的な視線を日本文化に差し向ける時、すでに言っていることではあるが、日本文化の創造性それ自身が内外文化の相補的な働き合いからまさに成り立っているということが、鮮明に浮かび上がってくるのである。



## ●「アジア—ことばによる理解とことばを越えた理解」

### 「伝統文化はどのように言葉を越えられるか—茶芸と茶道への視点」

陸 留弟

(華東師範大学教授)

陸氏の報告は茶という同じモノが、日中の両文化の歴史の中で、それぞれ「茶道」と「茶芸」という異なることばに収斂していったその事情に触れるものであった。歴史的には中国茶を学び導入することから日本茶はもちろん生まれたのであるが、それを異化させ、「茶芸」から「茶道」を発生させていったその元に、陸氏は、娯楽や健康と言った「実」から離れる、「型」を尊重する精神の存在を指摘した。「型」の宗教的と言ってもよい尊重が、反復所作から家元といった制度に至るまで、「茶道」のあり方を貫いているのである。

こうして中国茶との対比という、国際日本学的視点から「茶道」の特徴が分析されていったが、それは結果として、「茶芸」と「茶道」の間の乗り越えがたい壁を言うためではなかった。陸氏はかつては「茶道」を教えた「茶芸」が、現代では「茶道」から学ぶべきことを有しているとむしろ述べていくのである。それは「茶道」の精神的面というよりはむしろ社会的面に関わるが、こうして国際日本学がことばの違いの根の確認にまで至る時、それは同時にその違いを発展的に用いていく道をも開いていくのである。

### 「相互学習の昇華を求めて—ことばを越えた理解へ」

王 敏

(法政大学国際日本学研究所教授)

王氏の報告は陸氏が具体例に即して述べたことを、より大きく理論的に整理したものであった。歴史的にもまた現代においても、日本には「親中」と「反中」の間での、また中国にも「親日」と「反日」の間での、大きな揺れ動きが存在している。日中両者の間にはさらに第三項として西洋が入り込んで来ていって、さらに関係を複雑にしている。日本に即して見れば、「親」と「反」とを「和魂洋才」や「和魂漢才」といった仕方で多元的に調停しようしたり、あるいは、日本というローカリティにユニバーサリティを混ぜ入れて通約

の力を与え、「親」と「反」とともに乗り越えていくこうとしたり(宮沢賢治)、といった試みが行われてきた。西洋近代に直面しての開化の過程で、日中が互いを互いに異文化と見なす隔絶が生じたことはあったが、日中文化の現在においては、「同文同種」の再考と「全球化」(グローバライゼーション)の中での普遍性の再構築が進みつつある。このとき、国際日本学が明らかにしていくであろう、日本文化に本来の内発的な開かれた通約力は、問題を解決していく鍵となっていくことであろう。



## シンポジウム報告

### ●「ことばとことばを越えるもの」

#### 「西洋文明論としての新渡戸稲造『武士道』」

桑山 敬己

(北海道大学大学院文学研究科教授)

桑山氏の報告は、文化について書かれることばが常に前提にしている、①誰が書くのか、②誰を書くのか、③誰に書くのかの「三者構造」を認識することの重要性を、新渡戸稲造の『武士道』に即して明らかにしていくものであった。『武士道』がこの種の本でまれに見る国際的評価を勝ち得たのも、新渡戸がこの「三者構造」を意識した巧みな戦略の下でこの書を執筆したからである。ここでは、③読む者は西洋知識人であり、他方、①書く者と②書かれる者は日本人で、状況からして劣位に置かれた者である。このことから新渡戸は自分が書くことが、何より優位者である西洋知識人にとって意味を成すような様々な工夫を施したのである。例えば、説明のための類似概念をヨーロッパ古語などに語源学的に求め

ること、やはり説明のための類例を古今西洋の文芸作品から引いてくること、理論的展開に際しても西洋の学説を引いてくることなどなど。その結果として『武士道』は国粹的であるどころか、全くもってバタ臭い書物となっているのであり、日本を語りながら実は日本を鏡として西洋を語るものになっているのである。ただし翻って言えば、この書は武士道をインターナショナルな文脈に、やはりあくまでもナショナルな価値として置こうとしているのであって、それが普遍的な認知を求めるのも、やはり日本の個別性に対してなのである。こうして、この書は、そして恐らくは新渡戸の生涯そのものが、自と他、個別と普遍のはざ間を行き来するものだったと解釈されてくる。

#### 「ことばとことばのはざまから—関係性から考える国際日本学」

島田 信吾

(デュッセルドルフ大学東アジア研究所教授)

島田氏の報告は、今回の研究集会の全体を総覧して、国際日本学のあるべき姿について、一つ提案を行うものであった。それは論題にもあるように、一言で「関係性から考える」とまとめ得よう。氏が退けようとする第一はナショナリズムである。氏によれば、これは西洋近代の掲げる本有的で普遍的な理性のあり方にまで遡る考え方であって、理性はのっけから自足しており、他との関係性の中で開かれて形成されていくことを否定するのである。ヨーロッパ近代が実はイスラムとの関係性の中で立ち上がっていった経緯はこうして顧みられない。この図式に依拠するナショナリズム、すなわち近代国家も国民文化も自らに閉じ、自足していく、関係性は周縁的なアネクドートを生むだけのものに留められる。このことは言語観にも敷衍され、言語の多様性、翻訳の不可避性は、非効率なネガティブな事態としか評価されなくなるのである。こうして氏が退けようとする第二は、言語をあくまでも閉じたシステムと考えようとする立場である。そうではなく氏が説くのはむしろ、翻訳が基づき、また翻訳が生み出していく言語状況の多様性、すなわち関係性こそが、言語の常態であり、そこにこそ文化の力、創造性が宿るということである。そしてその面から言う時、氏によれば、日本文化はまずは中国文化との、その後は西洋文化・アメ

リカ文化との関係性なしには考え得ない翻訳文化であって、まさにその点において非常な優位を持つものと解釈されてくる。こうして、国際日本学は日本文化のこの個性に立脚する時に、単なる日本文化論を超える、真に生産的な学問となりうることになる。



### ●総括報告

#### 「国際日本学の今日と明日」

星野 勉

(法政大学国際日本学研究所所長・文学部教授)



当日以上の諸報告を受けて、当21世紀COEプログラムの遂行責任者である星野氏は、国際日本学の今日と明日を、以下の3項目に整理して総括を行った。

1)国際日本学は、日本文化に固有なものは、日本文化が自らに異質なものにあえて身を投じ、それを翻訳によって取り入れようとする中で分節されてきたものであると認める。すなわち、日本文化は積極的な意味で「翻訳文化」である。

2)国際日本学は方法としては「反照的原理(reflexive principle)」を用いる。すなわち、翻訳では内と外の二つの視点から光が投じられていくが、国際日本学は対象が浮き彫りにされるのはそのような内と外との相補的なシステムにおいてのみであると認める。

3)国際日本学はこうして、異なる視点からの凝視、異なる言語間での語りかけを粘り強く遂行して、隔たっているもの同士に連続性を、異質なものの同士に通約性を作り出そうとする学問的実践である。それは「関係的解釈学」(relational hermeneutics)である。

(法政大学文学部教授 安孫子 信)

## 第5回日中文化研究会 ● 日 時：2006年10月11日(水) 18:30—20:30 ● 場 所：ボアソナード・タワー25階 B会議室

### 「日本の社会構造の特徴を探る—中国的視点から見れば」

崔 世廣

(中国社会科学院日本研究所教授)

第5回日中文化研究会は、報告者として中国社会科学院日本研究所日本社会文化研究室教授・崔世廣氏を迎えた。

崔氏は1956年中国河北省生まれ。1988年に南開大学で中国における文化大革命後、最初の博士号・歴史学博士号を取得した。同年中国社会科学院日本研究所に入所して以来、松下政経塾、東京大学、慶應義塾大学などで客員研究員を歴任。現在、上智大学客員研究員をつとめている。専攻は日本思想史、日本社会文化論。著書に『近代啓蒙思想と近代化』(1989年)、『日本政治概論』(共著、1995年)、『一筆で描けぬ日本人』(共著、1999年)、『日本の社会思潮と国民情緒』(共著、2000年)のほか、論文が多数ある。

崔氏は「日本の社会構造の形成及びその特徴について」という報告テーマに沿い、2000年の日本史を縦軸にその構造的特徴を中国のそれと対比しながら説明した。日本社会の考察にはとくに、構造の視点、歴史の視点、中国の視点という複眼が欠かせないとした。崔氏の考察には、中根千枝の縦社会論やフランシス・シューの比較文明社会論が生かされている。

日本は弥生時代以降に農耕社会の成立と並行して社会が広域化し、小国の大分立期を経て国家の形成期に入ったという。そして、推古朝の改革によって統一国家・大和朝廷の性格付けがなされた。氏姓制度に象徴される大王家を中心とする諸豪族の連合政権の誕生である。この過程は日本神話や風土記にうかがうことができ、血縁を中心に構成された擬制的同族団体ともいえると、崔氏は指摘する。ここで、主従関係は上位に位置するものは上位であると同時に皆と平等、下位に位置するものは下位であると同時に皆と平等という日本独特の二元的な基礎構造が生まれた。

推古朝から平安時代中期にかけての中国との親密な交流によって、一時的に国家の意思が支配的になった。中国にならって律令制度を導入し中央集権化を図り、官僚制度や公地公民、班田制などが実施され、日本の社会構造の転換が試みられたのだ。しかし、二元的な独特の社会構造は復活する。班田制の衰退を内包した、墾田地系荘園がそれである。この、豪族が開墾した農地を都の公家に寄進するシステムが常態化し、公地に対する私有地の考え方方が根付いてくる。とくに東国など、都から遠い地域での荘園寄進が普通になると、國家の力を排した地縁的な関係が強くなつていった。そうして、大土地所有者との間に主従関係への復帰が普遍化し、武家社会を誕生させる動因になったといふ。

崔氏は、武士政権の鎌倉時代から徳川時代にかけての主従関係を通じ、二元社会が進化したと説く。まず、鎌倉時代に確立した幕府と朝廷の二元支配を象徴として挙げた。対立と共存の同時性を矛盾なく受け入れる社会構造が特徴である。將軍—御家人、惣領—庶子(宗家一分家)は縦の関係と横の合議制が同時に成り立っている。それから、室町時代には將軍と守護大名の関係、徳川時代には將軍と大名、藩主と家老、士と農工商、本家と分家、本山と末寺という神社系統などに日本の社会秩序が貫徹した。

二元的な社会では、ときに矛盾しあう存在の共存を許容し、複雑な考え方を普遍化する。血縁社会と地縁社会を通じた内向する集団主義や共同体主義志向であったり、固定した身分社会に反抗する実力主義や競争主義の台頭であったりする。また、義理と人情のせめぎあいは多くの文学のテーマになってきた。日本社会が封建制下にありながらも動的であった原因は、このようなところにあった可能性もあるといふ。

さらに、近代以後の日本社会構造の変容について、明治維新—明治時代、大正時代—昭和時代、戦後—冷戦終結、90年代以降に分け、現代日本が過去の歴史から引き継いだ二元的な社会構造から脱出できないのは当然であるとした。企業活動や政党活動もこれに無縁ではないといふ。長所としては、組織の安定性と強さ、多様性と統一性の両立、集団メンバーの序列化と平均化、集団への忠誠心と人情の重視であり、短所としては強いリーダーが育たない、社会の閉鎖性や対外交流を避けることなどに現れる。これから日本社会が近代以来の世界潮流であるグローバリゼーションと文化の多様性にどう対応するか、日本社会のユニークさと活力に期待した報告であった。

(国際日本学研究所教授 王 敏)



## 第6回日中文化研究会 ● 日 時：2006年11月1日(火) 18:30—20:30 ● 場 所：ボアソナード・タワー25階 C会議室

### 「日本人と中国人のコミュニケーション方略に関する一考察—謝罪という側面から」

高橋 優子

(文化学園専任講師)

日中間は未解決の難問が山ほどある。なかでも歴史認識とかかわる謝罪問題が、日中ともに敏感な難問であることはまちがいない。このテーマに異文化コミュニケーション学の角度から取り組んでいるのが文化学園専任講師・高橋優子氏である。

氏は長年中国の現地調査や中国人へのインタビューを積み重ねてきた。現場データを重視されるうえに社会学と心理学などの分析手法を駆使してきた。その結果、従前の文献に頼った方法では見逃されやすい、一連の個性に富む研究成果を公表している。

氏の主な著書、論文を紹介すれば——

「日中の謝罪のコミュニケーション方略に関する一考察—『補償の行為の申し出と行為の実行状況』に着目して—」(異文化コミュニケーション学会紀要、2005年)、「留学生の異文化に対する『気づき』と『態度』について」(文化女子大学人文・社会科学研究紀要、2003年)、「教員の自己改善における同僚の役割の一考察」(国立国語研究所日本語教育論集、共著、

1993年)などを挙げることができる。

以下は、氏の報告「日本人と中国人のコミュニケーション方略に関する一考察—謝罪という側面から」を引用した抜粋である。

現在、日本と中国の間では「謝る日本人、謝らない中国人」というステレオタイプが定着しており、謝罪行為に関する摩擦の事例も多数見られる。しかし事前調査を行った結果、多くの中国人は「謝るときは謝る」という



# 日中文化研究会報告

回答を出しておらず、謝らない中国人像が現代中国においても一般的なのが疑問が生じた。そこで日中の謝罪の定型表現の使用実態を調査し、両者の謝罪のコミュニケーション方略を比較することによりこの疑問に対する答えを得ようと考えた。質問紙調査の結果、中国人でも謝罪の定型表現を用いているケースが多数見られた。さらに、中国人のほうは日本人より、補償を申し出、実際に補償行為を実行するケースが多く見られた。この結果からは中国人の、言葉による形式的な謝罪だけではなく、行為をして見せることで双方がより深い納得を得ようとする姿勢が窺えた。

以上により、従来の中国人は自己の非を認めずに謝罪の定型表現を用いないというステレオタイプは現代中国において通用するとはいがたいことがわかった。「中国人も謝るときは謝る」のである。又、中国人の

場合、謝罪する際には補償の行為に言及する習慣があり、その点において、形式的に謝罪の定型表現を用いる傾向がある日本人よりも誠実な謝罪行為を行っているという見方もできると考えられる。日本人は自らこれまでのステレオタイプに疑問を持ち、新たな目で再度中国人とのコミュニケーションを見直すべきときに来ている。

この報告を通して、研究姿勢、研究方法を開拓していくことの大切さを知ることができた。また同時に、文献研究重視の古典的研究法を超えて多分野の手法を交差させ、立体的に構築させていく手法を見ることができた。

(国際日本学研究所教授 王 敏)

## 第7回日中文化研究会

ほうし がい くりやがわ はくそん

### 「豊子愷と厨川白村—『苦悶の象徴』の受容をめぐって—」

●日 時：2006年11月29日(水) 18:30—20:30

●場 所：ボアソナード・タワー25階 C会議室

楊 晓文

(滋賀大学国際センター助教授)

日本の漫画が中国で「普通」に読まれるようになったのは1990年代であろう。漫画または動漫は日本発信の漫画またはアニメをもとにしても一般的なイメージができあがつた。西洋ものより、はるかにメイドインジャパンの影響が基本的である。

それまで中国における「漫画」とは人々を楽しませ笑わせる絵には違いないが、諷刺画が主であった。その中国風「漫画」の原点も日本に求めることができる。戦前の日本留学生だった豊子愷が竹久夢二の草画に啓発されたことに遡及されるという。この豊子愷が帰国後に最初に中国風「漫画」・諷刺画を書き出したとみられるのだ。

滋賀大学助教授楊曉文氏の報告は、「豊子愷における芸術と文学の出発、形成及び発展の過程を追跡しつつ厨川白村の『苦悶の象徴』の受容という新視点から豊と白村の関係をも明らかにすると共に豊の創作と人生を捉え直す」ところに重点を置いている。以下に氏の報告文を紹介する。

洋画家となる夢を胸に来日した豊子愷は、東京の古本屋で偶然手にした竹久夢二の草画の代表作である『春の巻』に魅せられて、形似の洋画に疑いを持ち始め、写意の草画のような芸術を憧憬するようになった。かといって草画から洋画への方向転換は豊子愷にとって決して容易なことではなかった。重大な決断を迫られる上に、彼が草画に抱いた好感は大部分が直感によるものであった。それゆえ方向転換に踏み切ろうとした自分自身を納得させるために夢二作品の特質(暗示・象徴)を徹底的に検証し、それを理論的に裏付けたいという内発的な要求は当時の豊子愷にとって切実な問題となつた。その問題を解決したのが、『苦悶の象徴』の鑑賞論であり、この受容は一九二四年六月に豊子愷の執筆した「芸術の創作と鑑賞」という文章によって確認することができる。

わが子の言行をつぶさに観察し、それを吟味、反芻することによって、童心が真善美からなる三位一体の内的構造をなしているのを発見したことは、豊子愷の文芸と人生において、かなり重い意味をもつ。それが「人類の本性」「人生の根本」とはなにかを彼に深思させる契機となったと同時に、芸術と宗教をどう位置づけ両者のかかわりをいかにすべきかについての決断を彼が下す場合の決め手ともなった。また特に注目したいのは、豊の童心概念が精神性以外に社会性をも内包している点である。こののも、心という内面の眞の改造による豊子愷特有の現実関与のしかたを捉える視点が、これまでの研究には完全に欠如していたからである。童心と対聴的になっているのは大人たちの功利的な醜い偽りの心である。ところが、生身の人間として日常生活を営む上では、童心を重視すれば大人心は是正されるが、童心を軽視しがちな向きがあるかぎり大人心は消滅しない。童心をずっとそのまま保てば大人心は衰退の一途を辿らざるを得ないが、童心の持続困難なところが大人心の合理的存立を容易にする条件となる、という人間社会に内在するこの二律背反から、豊子愷の葛藤が生じ、彼の苦悶もまさにそこにあった。これこそが豊における『苦悶の象徴』の二度目の受容(創作論の受容)の基盤をなしている。このことは彼の告白によって明らかとなつた。

抗日戦争中、豊子愷と友人で從軍記者の曹聚仁とが、雑誌や新聞で激しい論戦を展開し、ついに二人は絶交する。これは抗戦期に『護生画集』

のような芸術が必要かどうかをめぐる双方の激しい意見の対立に由来する。敵に抗して戦う戦争に突入した以上、「慈悲」という観念はもう敵に対して持つてはいけない(曹「朋友与我」)。だから「護生画集はもう焼き捨ててよい」と曹聚仁は主張したのであるが、この論理は当時の中国においては支配的であった。これに豊は反論する。動植物を愛する象徴性の強い絵を介して慈悲の精神を尊び無益な殺生を戒める真意はまず生命尊重にある。生を大事にすることは心を大切にすることにつながる。生命尊重より強い武器はない。その武器を手にすることは正しい心の持ち主のみである。武力にしか頼らない敵を超えた論理をもっていないと、戦争の時代を終らせることができず、平和の時代を迎えることは永遠にないであろう。平和の時代、すなわち戦争後の時代を展望することそれ自体が文芸の使命だと思っているからこそ、それを預言する『護生画集』が必要不可欠だと豊は力説する。しかし、反論の理論的根拠として厨川白村が「文藝の根本問題に關する考察」において論じた「預言者としての詩人」の部分を受容したことを言明するのは当時の豊子愷にとって、いかにも不都合であった。これは、戦時中吉川幸次郎による『縁縁堂隨筆』を読んでそれを評価した谷崎潤一郎の「きのふけふ」の中中国語訳が雑誌『中学生』に掲載され編集者の葉聖陶から読後感を求められたところ、「戦争時期、敵国の人のために芸術の感想を語るのは適当でない」と、豊子愷が強い配慮を働かせたのと全く同様である。

このように社会的情況(抗戦期、文革期)への配慮によりその受容が言明できない事情さえもあった『苦悶の象徴』は豊子愷の生涯にわたって彼をささえる理論的支柱となり続けたことが発見された。この発見は激動の現代史の中を異色な絵や文章を残して生き抜いた豊子愷の世界に対する新たな解釈を可能にし、大陸における豊の文芸的営為に関する定説を覆し、これまでの日中両国の文学研究における『苦悶の象徴』の受容=魯迅の受容という図式に対しても疑問を呈するものである。

中国における豊子愷の功績は、中国人による日本留学の成果の一例でもあるが、その成果は中国の美術界に新しいジャンルを創出した。豊子愷と竹久夢二との出会いを軸に、厨川白村に影響された事実を確認しながら日中文化交流を紐解く、日中の文化関係を考えさせてくれるよい考論である。

(国際日本学研究所教授 王 敏)



## 第1回学術研究員定例研究会

中島 哲也／鈴村 裕輔／式町 真紀子

(国際日本学研究所学術研究員)

● 日 時：2006年11月25日(土) 14:00-17:00

● 場 所：80年館7階 大会議室(角)

去る2006年11月25日(土)、法政大学市ヶ谷キャンパス80年館7階大会議室(角)において、第1回国際日本学研究所学術研究員定例研究会が開催された。今回は学術研究員のうち、中島哲也、鈴村裕輔、式町真紀子の三名が報告を行った。(以下、敬称略)

「近世『職分』思想が示唆するもの」と題して行われた中島報告は、日本の近世における「職分」思想が「日本資本主義の精神」となりうるかを問う内容であった。

「規範概念としての『職分』」と「生業」としての職業と「職分」としての職業という「職業の二面性」を手がかりに進められた論究は、「全体の目的的了解」と「全体の目的を達成するための部分機能という自覚」という「部分としての自覚」が「職分」の特徴であると指摘された。

次に、部分と全体の問題を貝原益軒と荻生徂徠における「公」と「私」の概念規定が取り上げられたが、中島の整理によれば、両者の考えは次の通りとなる。

- ・貝原益軒：人間が人間本性を發揮すれば五常によって人倫秩序が維持される。  
→人倫秩序に関わる要素が「公」であり、人倫秩序を妨げる要素が「私」。
- ・荻生徂徠：政治秩序が「公」であり、政治秩序以外の領域が「私」である。  
→公的領域以外の私的領域では信教、学問の自由などは保障されるべき。

また、「職分」意識における秩序間の葛藤の例として石田梅岩の「職分」思想が検討された。顧客志向、適正利潤、交換の正義などを明確に認識した梅岩は、政治秩序という公的秩序によって私的領域としての経済秩序を正当化した。「天下泰平」という圧倒的側面の前に「職分」の意識を「家業」へと内向させざるを得なかつたという指摘は示唆的だった。

続く鈴村報告は「清沢満之における西洋哲学の受容と展開」と題して行われた。報告では、宗教家であるとともに日本における最初期の学者でもある清沢満之の西洋哲学の受容と展開について、主に次の点が指摘された。

- ・清沢の哲学受容はドイツ観念論、とりわけカントとヘーゲルの哲学から大きな影響を受けている。
- ・清沢は主著『宗教哲学骸骨』(1892年)において宗教と哲学が相互補完的な関係にあることを主張し、もし宗教と哲学との間に齟齬が生じれば宗教的な信仰ではなく哲学的な理性に従うべきだとした。
- ・現実世界における理性と信仰、哲学と宗教の共存と相互補完を唱えた清沢は、カント的な「理性の限界内の宗教」、あるいはヘーゲル的な認識と実践の領域からの超越の捨象という態度の模倣を越えた、独自の観点を提供したといえる。

また、清沢研究の最近の動向の紹介もなされ、2000年ご

ろから「哲学者としての清沢」の研究が活発化する兆しを見せたが、従来の「宗教家としての清沢」の研究を覆すまでには至っていないという現状が指摘された。

「和解の過程——<弱法師>と『リア王』における二組の父子を中心に」と題して行われた式町報告は、能楽の「弱法師」とシェークスピアの「リア王」を対象とした。

本報告では、時代的にも宗教的にもまったく接点をもたない二つの物語が、個別の設定の相違を越え、人間の根源に迫る普遍性をもつことが主に次の点を通して検討された。

- ・譲言を信じてわが子を追放した父親が、悲しみが高じて盲目となつた息子と対面し、最後は親子の名乗りをあげて故郷へ帰るという筋立ての「弱法師」では、弱者救済の場としての天王寺が「和解」実現のために重要な意味をもつ。
- ・純情な三女コーデリアを追放したが、長女と次女に虐待され、コーデリアの救いも及ばず悲嘆のあまり悶死するリア王と、譲言を信じて長男を追放したが策略に陥って両眼をえぐられ、絶望のうちに親子の再会を願うグロスター伯という二つの筋立てで構成される「リア王」では、フランスへと通ずるドーヴァーの意味が大きい。
- ・どちらの作品においても、見える目を失つて初めて親と子の和解が成立した。

こうした検討を通して、二つの作品が、「新約聖書」におけるイエスの復活劇に制約されない、普遍的な性質としての「奇跡」という要素を備えているのではないかという指摘がなされた。

(国際日本学研究所学術研究員 鈴村 裕輔)



## 国際日本学研究集会

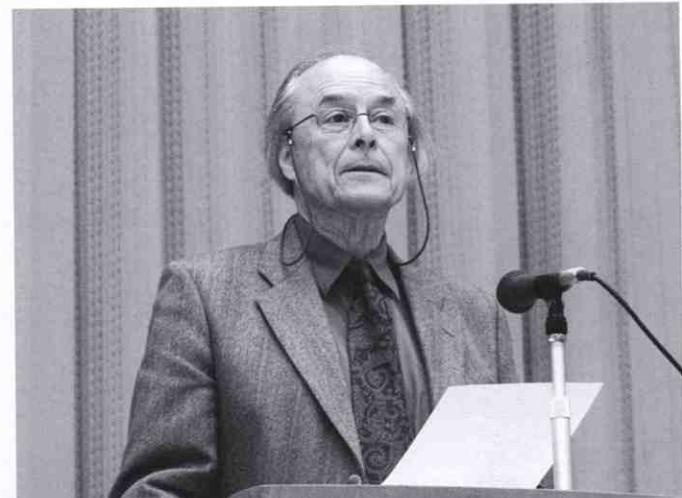
# 「能の翻訳を考える—文化の翻訳はいかにして可能か—」

●日 程：2006年12月15日(金)－17日(日)  
 ●場 所：ボアソナード・タワー26階 スカイホール、富士見坂校舎1階会議室

12月15日(金)－17日(日)の3日間、富士見坂校舎1階会議室およびボアソナード・タワー26階スカイホールにおいて、能楽研究所、国際日本学研究センター、同研究所による国際日本学研究集会「能の翻訳を考える—文化の翻訳はいかにして可能か—」を開催した。COE最終年度ということで、同プログラムの中で能楽研究所が進めてきた「能の翻訳」をめぐる研究成果のまとめとして、現在第一線で活躍しておられる外国人能楽研究者を多数招き、能の翻訳をめぐる問題について考えようと企画したもので、3日間でのべ300人を越える参加者が、活発な議論をかわした。

初日には、今回の研究集会の出発点となつた大学院の授業「謡曲の英訳を読む」の報告と、実際に〈千手〉〈田村〉の英訳を読むワークショップを行い、外からの参加者とも問題意識を共有できるように努めた。そのうえで、第二日はロイヤル・タイラー氏の講演「能翻訳を考える」と、シンポジウム「謡曲の翻訳をめぐって」を、第三日にはシンポジウム「能楽論の翻訳をめぐって」を据え、さらに、第一線の研究者による研究報告や本学大学院生による研究発表等もあわせて、能の翻訳をめぐるできるだけ多くの問題について様々な角度から議論ができるようなスタイルを目指した。

講演をお願いしたロイヤル・タイラー氏は、近年『源氏物語』の全訳を刊行されたことで有名だが、能の翻訳の第一人者でもある。会場には百人を越える人々が集まつたが、深く内容や登場人物の心理に踏み込んだ文学的香氣溢れる「タイラー訳」が生まれるまでを語る氏のお話に「深い感銘を受けた」という感想が多く寄せられた。シンポジウムのスピーカーや研究報告を引き受けさせてもらつた、そのほかの研究者の方々も、全員、日本語で書かれた能の作品や能楽論のテキストを研究対象にし、あるいは謡曲や能楽論の翻訳に取り組んで来られた方たちばかりである。多くの古典作品を素材とし、掛詞・縁語等を駆使した謡曲の複雑なテキストや、世阿弥が自分自身の創出した新しい芸術について、本来「以



心伝心」としか言いようのないような微妙な何かを伝えようと紡ぎ出した能楽論の言葉を、外国語に翻訳するときにどんな問題が起こり、どんな困難を乗り越えなければならないか、そしてまた、その困難を乗り越えて(あるいは、その困難にもかかわらず)どんなに豊かな成果が生まれ得るのか、彼らの報告は多様な事例を示し刺激的だった。また、ある固有の文化に根ざす何かを他の文化へと伝える(翻訳する)ときに考えねばならない問題に触れる報告も複数あり、「能の翻訳」を考えることが、より広く「言葉」や「文学」そのものについて考えること、あるいは「文化伝達」の問題等につながっていくことを示唆していた。

一方、大学院生の研究発表も、英訳を通して能作品を読むことで手に入れた新たな視点をそれぞれに活かしており、作品研究の新しい方法論の可能性を示したものもあった。日本の能楽研究を長年リードしてきた大家が、大学院生の発表を聞いて「なるほどこういう作品研究の方法も面白いし、有効である」とコメントしてくれたのは、大いに力づけられることだった。

もう一つ、今回の研究集会では、使用言語を日本語に限つたことも、特筆すべきことかもしれない。たとえ一流の日本文学研究者であっても、外国の方々にとっては、学会での発表を彼らにとっての外国語である日本語でおこなうというのは、非常に面倒なことである。が、今回の参加者は、全員、時間をかけて日本語の原稿を用意してもらつた。なかには、読み書きはともかく、普段の生活ではほとんど日本語を使っておられない方もいらしたが、3日間の討論も、すべて日本語で通してもらつた。あらためて、感謝したいと思う。一方、ゼミの大学院生たちは、英語が苦手なために日文を選んだ学生も多いにもかかわらず、二年間苦労して英語を取り組んでき、その成果を発表したわけで、両者の学問的レベルはもちろん違うが、しかし両方から歩み寄つたことの



効果は、当日の会場の盛り上がりからも感じられた。大学院生が世界的な研究者たちに対して臆することなく質問する様子を高く評価してくださるコメントも頂いたが、院生たちは、謡曲の英訳に関しては、国内のどんな有名な能楽研究者たちよりも多くを読み、勉強し、考えてきた。2年間、様々な英訳を読んでいた中で、どうしても納得できなかつたこと、あるいは「こうも考えられるのではないか」という別解など、当日出席されていた翻訳者当人に質問したくてしかたなかつたことがたくさんあり、いわば「待ちかまえて」いたのである。そういう彼らの姿勢を、外国人研究者たちも好意的に受け止め、個々の質問に真剣に答えてくださいました。

本研究集会の趣意書には、今回の企画が、「外国人の能楽研究者と共に通の土俵に立ち、真に対等で刺激的な議論を行

ない得ているか」「できていないなら何が不足しているのか」という問題を考えることもつながっているはずである、と記した。今、研究集会を終えて、「真に対等で刺激的な議論」は可能であるとの思いを強めている。登壇者たちからもフロアからも、豊かで知的刺激に満ちた3日間であったとの感想を頂戴したが、なかでも、他大学の大学院生や留学生たちが、「自分たちもやりたい」と面白がってくれたことに、力づけられた。今回の成果のうえに、次はより広く、また若い世代も組み入れて、国内外の研究者が本当の意味で対等かつ率直に意見を交わし、能楽研究の新しい側面を切り開いて行きたいと考えている。

(能楽研究所教授 山中 玲子)



## プログラム

●12月15日(金) 13時00分－16時30分  
富士見坂校舎 会議室

### 【報告】

大学院ゼミ「謡曲の英訳を読む」の報告  
山中玲子(法政大学教授)

### 【ワークショップ】

〈千手〉 スティーヴン・ネルソン(法政大学教授)  
〈田村〉 ジョン・プロウカリング(法政大学教授)

●12月16日(土) 10時00分－18時00分  
ボアソナード・タワー26階 スカイホール

### 【研究報告】

「謡曲翻訳の歴史」  
マイケル・ワトソン(明治学院大学教授)

### 【講演・討議】

「能翻訳を考える」  
ロイヤル・タイラー(オーストラリア国立大学名誉教授)

### 【研究報告】

「フェノロサ・パウンド・小西甚一翻訳における創造的誤解」  
竹内晶子(法政大学専任講師)

### 【シンポジウム(1)】謡曲の翻訳をめぐって

司会：山中玲子  
「演出理解を高めるための能翻訳」  
モニカ・ペー(大谷大学教授)  
「言語の浮き橋—禅竹の謡曲を英訳することー」  
「演出理解を高めるための能翻訳」  
ポール・S・アトキンス(ワシントン大学シアトル校助教授)  
「謡曲にとって詩とは何か」  
マイケル・エメリック(翻訳家・コロンビア大学大学院生)

●12月17日(日) 10時00分－17時30分

ボアソナード・タワー26階 スカイホール

### 【研究発表】(法政大学大学院生)

「和解の過程—〈弱法師〉と『リア王』における二組の父子を中心に」  
式町真紀子

「『なつかし』様々—〈井筒〉〈野宮〉を中心として」  
柳瀬千穂

「遊女の恋の能としての〈班女〉—R.タイラー氏訳を端緒として—」  
小川健一

### 【報告】「能楽論文用語英訳リストに関する会議の報告」

「演出理解を高めるための能翻訳」

中司由起子(法政大学兼任講師)

「演出理解を高めるための能翻訳」  
伊海孝充(法政大学兼任講師)

### 【研究報告】

「ヨーロッパにおける能翻訳」  
スタンカ・ショルツ(トリア大学教授)

### 【シンポジウム(2)】能楽論の翻訳をめぐって

司会：衣笠正晃(法政大学教授)

「能楽論の翻訳をめぐる所感、二つ三つ」

表 章(法政大学名誉教授)

「世阿弥の英語」

トム・ヘヤー(プリンストン大学教授)

「“心より心に伝ふる花”は英訳可能か」

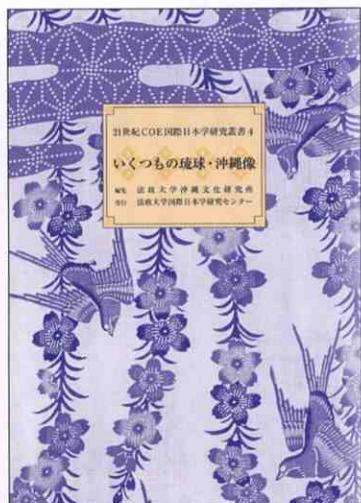
シェリー・フェノ・クイン(オハイオ州立大学教授)

## 活動の足取り

1. ワークショップ パリ・シンポジウム第1回成果検討会『パリ・シンポジウムを振り返る』桑山 敬己氏、『国際日本学構築に向けての課題—パリ・シンポジウムをうけて—』星野 勉氏 2006.7.31 14:00~18:00 80年館 7階大会議室(角)
2. ワークショップ パリ・シンポジウム特別成果検討会『翻訳と文化アイデンティティ』島田 信吾氏 2006.9.26 18:30~20:30 ポアソナード・タワー25階 C会議室
3. ワークショップ パリ・シンポジウム第2回成果検討会『日本学への2、3の提言—パリ・シンポジウムに参加して』田中 優子氏、『ヨーロッパにおける日本研究と人文科学の未来』ジョセフ・キブルツ氏 2006.9.30 17:30~21:00 ポアソナード・タワー19階 D会議室
4. ワークショップ パリ・シンポジウム第3回成果検討会『韓国における親日・反日から日本学を考える』崔 吉城氏、『日本学の可能性—中国の視点から—』王 敏氏 2006.10.21 17:30~21:00 ポアソナード・タワー25階 C会議室
5. 国際日本学シンポジウム 「国際日本学—ことばとことばを越えるもの」 2006.11.18~19 ポアソナード・タワー26階 スカイホールほか
6. 第1回学術研究員定例研究会 2006.11.25 14:00~16:00 80年館 7階 大会議室(角)
7. 国際日本学研究集会 「能の翻訳を考える—文化の翻訳はいかにして可能か—」 2006.12.15~17 ポアソナード・タワー26階 スカイホールほか
8. 学術フロンティア成果検討会 「日本学の総合的研究」 2006.12.25 13:00~18:00 ポアソナード・タワー25階 B会議室
9. 第2回学術研究員定例研究会 2007.3.23 15:00~17:00 80年館 7階 大会議室(角)

## 新刊案内

### 21世紀COE国際日本学研究叢書4「いくつもの琉球・沖縄像」



この叢書には、以下の内容を収録している。

- ・『二一世紀COE国際日本学研究叢書4』刊行にあたって 星野 勉
- ・琉球弧をめぐる歴史認識と考古学研究 「奄美諸島史」の位相を中心に 高梨 修
- ・関係性の中の琉球・琉球の中の関係性 吉成 直樹
- ・「糸満人」の近代 もしくは「門中」発見前史 與那覇 潤
- ・「琉球民族」は存在するか 奄美と沖縄の狭間・沖永良部島をめぐる研究史から 高橋 孝代
- ・幻の島 琉球の海上信仰 酒井 卵作
- ・大城立裕文学におけるポストコロニアル ハイブリッドとしてのユタ／ノロ リース・モートン
- ・在関西のウチナーンチュ 本土社会における歴史と、個人的な差別、偏見体験 スティーブ・ラブソン
- ・多元的歴史認識とその行方 アイヌ研究からの沖縄研究の眺め 坂田 美奈子

### 法政大学国際日本学研究所・国際日本学研究センター

〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1  
法政大学市ヶ谷キャンパス 第一校舎4階  
TEL. 03-3264-9682 FAX. 03-3264-9884  
E-mail: nihon@hosei.ac.jp  
URL: <http://aterui.i.hosei.ac.jp/cgi-bin/nihongaku-top.htm>

